

西へ向かう開拓者たち

年表	
年代	重要な出来事
1846.2.4	東部の聖徒たちがブルックリン号で出航する
1846.7.21	モルモン大隊の行軍が始まる
1846.7.31	ブルックリン号がサンフランシスコ湾に到着する
1846.8	「ミシシッピの聖徒」がコロラドのプエブロに到着する
1846.9 - 11	モルモン大隊の3つのグループが病気のためにコロラドのプエブロへ向かう
1846 - 1847冬	ウィンタークォーターズにおいて先発隊の西部への旅の準備が進められる
1847.1.14	西部への旅に関して、主の言葉と御心がブリガム・ヤングに示される
1847.4.15	先発隊が西部への旅を開始する
1847.7.24	ブリガム・ヤングがソルトレーク盆地に到着する
1847.12.27	アイオワのケインズビルで、新しい大管長会が教会員の支持を受ける

◀ モルモン大隊の兵士を募るブリガム・ヤング

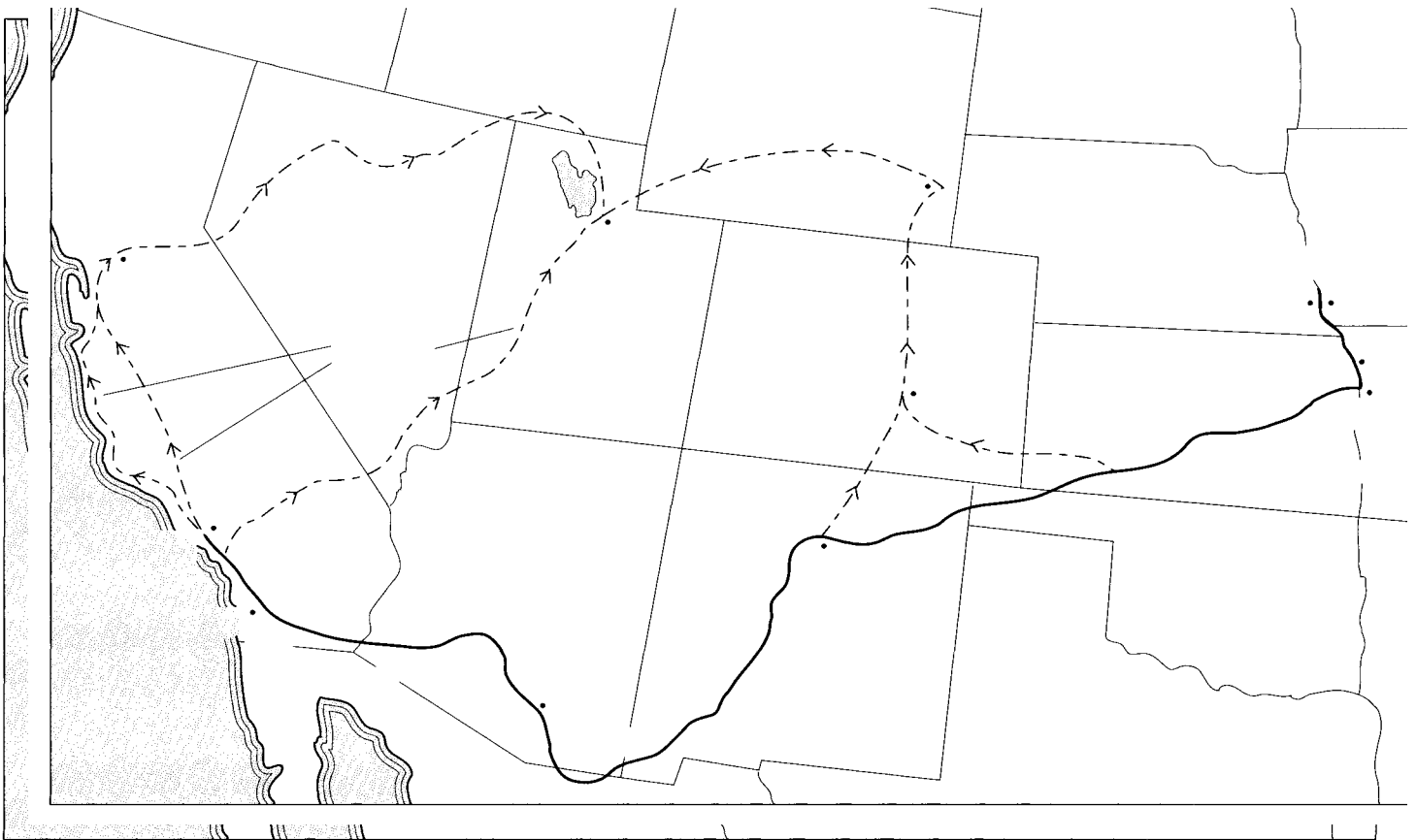
ウィンタークォーターズとアイオワの荒野にいた末日聖徒たちが、1846年から1847年にかけての冬をじっと待ち、春の重大な旅の計画を立てている間に、すでに西への移動を始めている3つの聖徒のグループがあった。モルモン大隊と、ブルックリン号で出航した合衆国東部出身の教会員、「ミシシッピの聖徒」と呼ばれた小さなグループがそれである。

モルモン大隊の行軍

合衆国陸軍のジェームズ・アレン大尉は、モルモンによって編成される5つの隊を徴募の後、中佐に昇進した。アレン中佐の指揮の下に541人の兵士、35人の女性（そのうちの20人は兵士たちの衣服の洗濯係に任命されていた）、42人の子供たちが、1846年7月21日にフォートレブンワースへ向かって行軍を開始した。出発に先立って、教会の指導者によって士官に選ばれていた全員が、十二使徒会の会員たちから個別に面接を受けた。十二使徒たちは彼らに対して、信仰に忠実に生きるなら命を落とすことはないと言った。ウィリアム・ハイド軍曹は、彼らは、「祈ることを忘れず、神の名を尊び、道徳的な清さを厳格に守るように、また、すべての人に愛をもって接し……避け得るかぎり、人の命を取ることがないように」¹求められたと記録している。

それでも、モルモン大隊の出発は多くの人々を心配させた。妻と二人の小さな子供を年老いた親戚に託して出発したウィリアム軍曹はこう書いている。「妻や子といつ再会できるかは、神のみぞ知ることであった。しかし、わたしたちは不満を言いたいとは思わなかった。」²夫がミズーリのクルック川の戦いで負傷していたドルシラ・ヘンドリックスは、御霊の声によって諭されるまで、長男ウィリアムの入隊を許そうとしなかった。大隊が出発する日の朝、彼女はまたふさぎ込んでいて、隊員の集合を呼びかける太鼓が鳴らされている場所へ、夫と一緒にいくことができなかった。そして牛の乳搾りへ行き、ウィリアムの安全を祈っていたのである。彼女は次のように書いている。「そのとき、その声が……わたしに答えて言った。『祭壇にイサクをささげたアブラハムになされたと同じように、あなたにもなされる。』そのとき自分が乳搾りをしていたかどうか覚えていない。主が自分に語っておられると感じていたからである。」³

新兵たちはミズーリ川東岸に沿って230キロ南下し、そこから川を渡り、1846年8月1日にフォートレブンワースに到着した。そこで隊員たちは支給品、銃、その年の被服費として各人42ドルをあてがわれた。このとき、とりでの主計官は、全員が給与台帳に自分で署名できるのを見て驚いている。彼がそれまでに給付をしてきた志願兵で、文字を書けたのは3分の1にすぎなかったからである。隊員の給与の一部は



モルモン大隊のアイオワからカリフォルニアまでの行軍路。病気のために3つのグループがコロラドのプエブロに送られた。彼らは後にワイオミングで先発隊と合流した。



ジェファースン・ハント(1803 - 1879年)とその妻は1834年に福音を受け入れた。ハント兄弟はモルモン大隊のA中隊の隊長となった。彼の二人の息子もモルモン大隊に加わった。後に彼はユタのプロボ, カリフォルニアのサンベルナルディノの入植事業を助けた。ユタのハンツビルは彼の名にちなんだ地名である。

パーリー・P・プラットらによって集められ、教会へ送られた。これらの金は、アイオワや末組織の領地にいた隊員の家族を支えたり、貧しい会員たちのノーブー撤退の援助、イギリス伝道に出たパーリー・P・プラット、ジョン・テラー、オーソン・ハイドへの支援のために用いられた。

スティーブン・W・カーニー將軍の率いる軍は、ニューメキシコを合衆国領とするために、6月にはすでにサンタフェを攻略していた。モルモン大隊は状況に応じて、カーニー將軍の指揮下に入り、その作戦遂行の一翼を担うことになっていた。大隊はフォートレブンワースに2週間とどまった。酷暑で、多くの兵士が病に、特に熱病にかかったのである。彼らの指揮官アレン大佐は病状がひどく、大隊が行軍を再開したときに、彼らとともに出発できない状態であった。そこで、モルモンの幹部将校ジェファースン・ハント大尉が暫定的に大隊を指揮することになった。ミズーリ川を出発してから約2週間後に、大隊員たちはアレン大佐の死を知らされた。彼らはそれまでに慈悲の人アレン大佐を慕うようになっていたために、その死を深く悲しんだ。

モルモンの士官たちは、ハント大尉が継続して自分たちの指揮を執ることを望み、ボーク大統領に彼の任官を求める書簡を提出した。しかしそのときすでに、後任の指揮官として、正規軍のA・J・スミス中尉が大隊に向かって旅を進めていた。大隊の歴史記録係ダニエル・タイラーはこう書いている。「スミスの任官は、いまだそのひととなり知られていない時期であったが、アレン大佐の死以上に、大隊員たちの気持ちを暗くさせた。」⁴

スミス中尉は、カーニー將軍がカリフォルニアへ向かって出発する前に追いつこ

西へ向かう開拓者たち

うとして、サンタフェの行軍の速度を上げた。これが兵士たちの体力をひどく消耗させた。彼らへの随行を許されていた妻子たちにとってはなおさらであった。この強行軍のために、兵士たちはほとんど休息が取れず、疲労し切った者たちは本隊から遅れ、夜の宿営の時間になってようやく追いつくという有様^{ありさま}であった。この強行軍に輪をかけて悪かったのが、ミズーリ出身のジョージ・B・サンダーソン軍医の職務遂行ぶりであった。彼はモルモンへの嫌悪感を明言し、1本の汚れたスプーンでカロメルやヒ素を無理やり飲み込ませた。兵士たちは彼に「やぶ医者」「死神博士」と、ぴったりのあだ名を付けていた。植物性の薬品を上手に使うウィリアム・マッキンタイヤという医師が大隊の副軍医として任じられていたが、彼は軍医のサンダーソンの命令によらなければ、苦しむ友人たちを見ても何も手を施すことができなかった。

現カンザス州内アーカンソー川を最後に渡った9月16日に、スミス中尉は、兵士たちの家族の多くを冬に備えてプエブロ（現コロラド州内）のメキシコ人村落まで送り届けるために、ネルソン・ヒギンズとほか10名を派遣した。大隊の兵士たちはこの処置に強く反対した。兵士たちの家族はカリフォルニアまで本隊への随行を許されるという約束があったからである。しかし、前途に待ち受ける困難な旅を考えると、この決定は賢明な選択であることが証明された。1か月後サンタフェにおいて、病気の兵士と、5人を除く女性全員が本隊を離れて、ジェームズ・ブラウンの指揮の下に、先にプエブロに行っていたグループに合流するために送られて行ったのである。そこで大隊員たちは、プエブロで越冬していたジョン・ブラウンと彼が率いるミシシッピの聖徒たちと出会った。

1846年10月9日に、疲れ切った兵士たちが、約6,000人の住民を擁するニューメキシコを中心地サンタフェにようやく到着した。カーニー将軍はすでにカリフォルニアへ出発した後で、サンタフェはミズーリ時代から聖徒たちに対して友好的であったアレクサンダー・ドニファン大佐の指揮下にあった。ドニファンはモルモン大隊の到着をたたえて100発の礼砲を放たせた。サンタフェでスミス中尉はフィリップ・セントジョージ・クック中佐に大隊の指揮権を引き継いだ。大隊の兵士たちは、クック中佐を公明正大で、なおかつ確固たる信念を持つ指揮官として尊敬するようになった。新しい指揮官は、サンタフェからカリフォルニアへの路程の先鞭^{せんべん}をつけるようにとの命令を下した。リオグランデ川沿いに進路を南に変えながら、大隊の兵士たちは時々スペイン軍やメキシコ軍に先を越されたこともあったが、全体的に見れば先陣を切って進んでいた。再び病が大隊を襲い、苦しい行軍が始まった。11月10日に、疲労し、衰弱した55人が進路を逆に、プエブロへ向かった。

行軍を続ける350人の士官と兵士を苦しめたのは、食糧と水の不足だけではなく、砂地の続く進路も絶えず彼らを悩ませた。兵士たちは深い深い砂地にはまった家畜たちに長いロープを付けて引っ張り上げたり、幌馬車の前を2列に並びながら進んで車がうまく進むように地固めをしたりしていた。ツーソンに向かって北へ進路を変えたときに、彼らは野牛の大群に遭遇した。それはスペイン人やメキシコ人の牧場主たちに見捨てられたものであった。その野牛たちは行軍の列に向かって殺到し、身の危険を避けようとする兵士たちを追いつけた。この「戦い」はわずか数分で終わったが、10頭から15頭の動物が命を落とした。大隊の家畜のうち2頭が角で突



フィリップ・セントジョージ・クック（1809 - 1895年）は14歳のときに、合衆国陸軍士官学校に入学した。彼はその軍務のほとんどを辺境の地で果たし、大平原を数度横断している。彼はサンタフェでモルモン大隊の指揮官としての任務を引き継いだ。スミス中尉の強行軍から解放された隊員たちは、この新任の指揮官を歓迎した。

クックの指揮の下に、健康に問題のある隊員たちがカリフォルニアへの行軍を再開できるようにするため、女性たちと病人がプエブロへ送られた。サンディエゴに到着すると、彼は隊員たちの奮闘を称賛して、大隊の隊員たちは「老練な兵士が持つ欠かすことのできない優れた特質を示した」と語った。

時満ちる時代の教会歴史



カリフォルニア北部コロマにおける公式に認められた最初の金の発見は、1848年1月24日にジョン・サッターの製材所においてなされた。サッター製材所にいた11人の白人男性と一人の女性のうち、少なくとも6人はモルモン大隊を除隊となった教会員であった。この有名な発見について最も広く受け入れられた記録を残したのが大隊の隊員だったヘンリー・ビグラーである。彼はこう書いている。「24日月曜日、今日、金らしき金属が放水路で見つかった。水車場の親方ジェームズ・マーシュアル（マーシャル）が最初に見つけた。」⁶

ブリガム・ヤング大学図書館の厚意により掲載



モルモン大隊退役軍人

1898年に、カリフォルニアにおける金の発見の15周年記念行事に、最初の発見がなされたときにそこにいた4人が出席した。その4人は皆、末日聖徒である。左から、ヘンリー・W・ビグラー、ウィリアム・J・ジョンストン、アザリア・スミス、ジェームズ・S・ブラウン。

き刺されて死に、3人の兵士が負傷した。この出来事は「野牛との戦い」として後々まで伝えられることになったが、大隊が長い行軍の中で経験したたった1度の戦いであった。

大隊はわずかな兵のメキシコ軍守備隊が駐屯していたツーソンをこれといったこともなく通過した。そしてヒラ川沿いに進むカーニー將軍のルートに再び入った。コロラド川の向こうには人跡未踏の砂漠が遠々と百数十キロも続いていた。そこでは深い井戸を掘らないかぎり、水を得ることはできなかった。大隊の兵士たちはそこで深い砂地、日中の酷暑、夜の酷寒に苦しめられた。弱った家畜たちは食肉用とされ、どの部分も余すことなく兵士たちの胃の中に収められた。皮の部分でさえも、煮立てて柔らかくしてから食用としたのである。このころまでに多くの兵士はほとんど素足に近い状態になっていた。熱い砂から足を守るために、牛の皮や古い衣類を巻き付けていた者もいた。砂漠を過ぎ、太平洋岸の地域に近づくと、山岳部の険しい道は、ロープや滑車を使って幌馬車を通さなければならなかった。そして1847年1月29日、大隊は2,030マイル（約3,200キロ）に及ぶ行軍の果てに、ついにミッショサンディエゴに到着し、カーニー將軍に報告した。カーニーは2月にブーク大統領によってカリフォルニアの司政官に任命された。

カリフォルニアはすでに合衆国領となっていたため、大隊の兵士たちはサンディエゴ、サンルイスレイ、ロサンゼルス守備に当たる駐留軍としての任を果たした。その間、カリフォルニア南部において、この聖徒たちは地元の市民たちの間で重んじられるようになった。サンディエゴの聖徒たちは郡庁舎や一般の家屋の建設、れんがの製造、井戸掘りなどに携わり、地域の建設事業に大きな貢献をした。7月16日の志願の兵役期間を終えた大隊員たちは除隊となったが、81名は再入隊し、さらに6か月兵役に就く選択をした。

除隊となった者たちのほとんどは、ソルトレーク盆地の聖徒たちとの合流を目指して東へ行くために、まず北カリフォルニアへ向けて出発した。彼らはその途中、ジェームズ・ブラウン大尉に出会った。彼はオグデンの共同体を創設した開拓者であり、長年にわたり、オグデンのステーキの副会長を務めた人物である。ブラウンは、独身者は1847年から48年にかけて冬をカリフォルニアにとどまって働くようにと求める、ブリガム・ヤングのメッセージを携えていた。該当するほとんどの者がブリガム・ヤングの指示に従った。そして彼らの多くはサクラメント川のサッターのとりででその冬を過ごし、カリフォルニアのゴールドラッシュの幕開けとなる1848年1月の金の発見に一役買ったのである。そして次の夏が来て、彼らはサッターとの契約期間を円満に終え、金の採鉱地を後にして、ソルトレーク・シティーやミズーリ川方面にいた家族のもとへ行った。

ブルックリン号の聖徒たち

西海岸地域に最初に到達した末日聖徒のグループは、モルモン大隊ではなかった。初めて西海岸へ到達したのは、奇しくも聖徒たちのノーブー脱出が始まったと同じ1846年2月4日に、ブルックリン号でニューヨークを出港した聖徒たちの一団であった。1845年の8月に教会の指導者たちは、南太平洋の聖徒や南米最南端経由でイギリスから移住して来る聖徒たちのために、カリフォルニアに中継地点を作る必要があ

西へ向かう開拓者たち

ブルックリン号は1834年にメイン州ニューキャッスルで建造された全装備帆船。445トン、全長125フィート（約38メートル）、全幅28フィート（8.5メートル）、喫水13フィート（4メートル）。船長のアベル・W・リチャードソンは、この船の共同所有者の一人であった。

サミュエル・ブラナンが率いる238名の末日聖徒を乗せたこの船には、800人分の様々な道具類、新聞『預言者』を刷った印刷機、大量の教科書、6か月から7か月分の食糧なども積み込まれていた。ブルックリン号が出航した1846年2月4日に、時を同じくして、聖徒たちのノーブー脱出が始まった。



と判断していた。プリガム・ヤングは、若くて精力的なサミュエル・ブラナンをサンフランシスコ湾地域の教会の代理人にしようと考えていたようである。ニューヨークで教会の新聞『預言者』（*Prophet*）を発行していたブラナンは、1845年の9月に、用船契約を結び、聖徒たちを指導するようにとの任を授けられた。

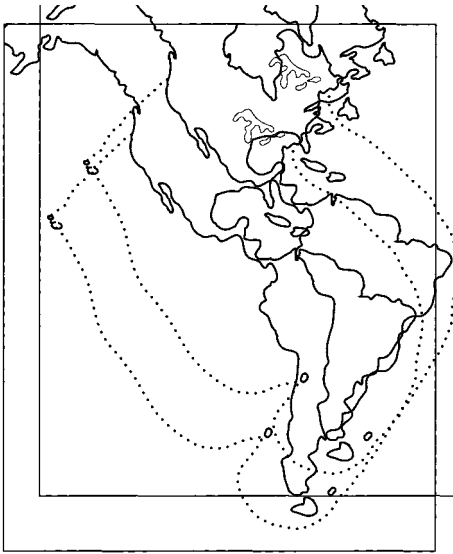
1845年の10月から12月にかけて、サミュエル・ブラナンとパーリー・P・プラットは東部各地の支部を訪ね、1月中ごろに船で西部へ向かうグループとして男性70人、女性68人、そして100人の子供たちを集めた。彼らはおもに農夫や職人で、西海岸で新たな入植地の建設に必要なあらゆる道具類を携えた。彼らはまたかなりの量の教科書、そして新聞『預言者』の発行に用いた印刷機も運んだ。ブラナンは月に食糧を含めて大人一人75ドル、子供はその半額で用船契約を結んだ。「ブルックリン号の聖徒」として知られる彼らは、教会の最終的な目的地の選択と確立を助けたいとの希望を抱いて、カリフォルニアへ向けて出航した。

ブルックリン号の航海は、大西洋と太平洋で1度ずつ遭遇した激しい嵐のときを除けば、比較的穏やかなものであった。彼らの船旅は、21箇条の規則によって各自の行動が取り仕切られていた。起床は6時で「上着を着、カラーを付けた、きちんとした服装でなければ、それぞれの船室から出ることは禁じられていた。」船室の掃除は7時までに済ませ、点検と換気を毎日行なった。朝食は8時半（子供が先）、夕食が3時から5時、そして夜の8時に「冷えた食事」が出た。病人の世話、グループのための食事の準備などについても規則が定められた。日曜日の午前中には礼拝行事が行われ、「健康な者はすべて、ひげをそり、体をきれいにし、神聖な行事にふさわしい身



ユタ州歴史協会の厚意により掲載

サミュエル・ブラナン（1819 - 1889年）は、カリフォルニアから東進してソルトレーク盆地へ入ったが、プリガム・ヤングに、さらにカリフォルニアまで旅を続けるように説得することはできなかった。ブラナンは感情を害し、西海岸へ戻った。彼はカリフォルニアでは、政治家、土地投機家、新聞社主として名を上げた。しかし、この世を去る時が近づいたところには、カリフォルニアのにわか景気でつかんだ富は泡のように消えていた。



ブルックリン号の進路。ケープホーンを過ぎた後に、聖徒たちを乗せたブルックリン号は嵐のために東へ500マイル（約800キロ）押しやられ、1846年5月4日にファンフェルナンデス島（ロビンソン・クルーソーの島）に寄港した。ここで聖徒たちは新鮮な水、果物、野菜を調達した。5日後には、サンドイッチ（現ハワイ）諸島へ向けて出帆し、6月20日に到着した。そしてブルックリン号は1846年7月末にヤーバブエーナ（現サンフランシスコ）に到着した。ニューヨークから5か月以上の船旅であった。



「ミシシッピの聖徒たち」をコロラドのプエブロまで連れて来た後、ジョン・ブラウン（1820 - 1897年）は1870年ごろまで、聖徒たちの移住を熱心に助けた。彼はまた29年にわたって、ユタのプレザントグローブワードの監督を務めた。様々な公職にも就き、20年間プレザントグローブの町長の任にあった。

繕いをして、これに出席するよう求められた。』ブルックリン号はケープホーンを経由して、ダニエル・デフォーの作品『ロビンソン・クルーソー』で有名なファンフェルナンデス島に寄港した。またサンドイッチ諸島（現ハワイ諸島）にも10日間寄港した。航海中に二人の子供が生まれ、出生時にブルックリン号がいた海の名にちなんでそれぞれアトランティック（大西洋）、パシフィック（太平洋）と命名された。また航海中に10人の乗客が亡くなった。

1846年7月31日にブルックリン号がサンフランシスコ湾に到着したとき、カリフォルニアに合衆国旗を掲げる最初のアメリカ人になりたいと望んでいたブランンは、メキシコの税関として使われていた建物の上にすでに自国の国旗がはためいているのを見て期待を裏切られた。ブルックリン号の聖徒たちの中には、海岸に近い所で仕事を探す者もいたが、多くの者はもっと内陸部へ行き、ニューホープが西部における聖徒たちの中心地になることを夢見ていた。1847年1月には、ブランンはすでにカリフォルニアにおける2番目の英字新聞『カリフォルニアスター』（*California Star*）を発行していた。ブルックリン号の聖徒たちのほとんどは、教会がグレートベースンに入植していることを知らず、ブランンの指示に進んで従った。

1847年4月に、サミュエル・ブランンは教会の主体がある東へ向かい、その地の聖徒たちをカリフォルニアへ導くという申し出をしようとした。彼は7月にグリーン川（現ワイオミング州内）でブリガム・ヤングと開拓者たちに会った。その結果、トーマス・S・ウィリアムズとサミュエル・ブランンが、大隊員とミシシッピ隊をソルトレーク盆地に導くために派遣された。この二つのグループは前にプエブロで冬を過ごし、その当時は、ソルトレーク・シティーへ向かっている途中であった。ブリガム・ヤングや聖徒たちとソルトレーク盆地で数日を過ごした後、ブランンは、教会の用件を処理するために、モルモン大隊のジェームズ・ブラウン大尉とともにカリフォルニアへ戻った。西海岸に教会本部を置くことはしないというブリガム・ヤングの決定に失望したブランンは、間もなく背教した。ブルックリン号の聖徒の中にも一部、彼に従う者がいた。ブランンはカリフォルニアのゴールドラッシュを大々的に宣伝し、この地域で最初の富豪となった。しかし愚かな投資によって財産を失い、貧困のうちにこの世を去った。

プエブロの聖徒たち

先に見てきたように、1846年から47年にかけての冬に、約275名の末日聖徒が、ミズーリ川の聖徒の主体から西へはるかに離れたプエブロにしっかりとした共同体を作っていた。この共同体は、病気が理由でモルモン大隊から別れた3つのグループと、すでに8月にプエブロに来ていた約60名の「ミシシッピの聖徒」から成っていた。

この南部の教会員たちは、ジョン・ブラウンの指導下にあった。彼は1845年にミシシッピからノーブーに移って来た人物である。そして1846年の1月に、ブリガム・ヤングから、南部の同胞の聖徒たちのもとへ戻り、西部への移住に加わるよう彼らを説得する任を与えられた。ブラウンは43人の聖徒を、1,000キロ以上離れたミズーリ州インディペンデンスまで導き、そこでさらに加わった14人を迎え入れた。そして、ブリガム・ヤングが率いる聖徒たちの主体に追いつくためにオレゴントレイルを西へ進んだ。しかし7月にはネブラスカ西部のチムニーロックまで来たが、先を行

西へ向かう開拓者たち

く聖徒たちの姿はまだ見えなかった。カリフォルニアから戻るわな猟師たちの話によると、その先にモルモンはいないということであった。ブリガム・ヤングがミズーリにウィンタークォーターズを建設する決定をしていたことを知らなかった彼らは、フォートララミーへ進むことにした。一行はフォートララミーでジョン・リチャードという人物に会った。彼はわな猟師で、ブラウンたちの一行にプエブロにある自分の交易所の近くで冬越しをするように勧めた。その後、プエブロに移った彼らのもとに、ブリガム・ヤングがウィンタークォーターズにとどまっているという知らせが届いた。

プエブロでの生活は比較的落ち着いたものであった。ミシシッピの聖徒たちは鹿猟のほかにかぶ、かぼちゃ、豆、メロンの栽培をし、毛皮猟師たちのために働いて、とうもろこしでその支払いを受けた。また新たにやって来た大隊員たちと力を合わせて、教会兼用の学校を建てた。大隊員たちはいつもの軍事教練を続け、ダンスパーティーがよく行われた。この冬の間に7人の子供が誕生したが、9人の死亡者も出た。

春になって、ブリガム・ヤングがプエブロの聖徒たちに手紙をよこし、開拓者の本隊はグレートソルトレークに近いグレートベースンに向かうという計画を知らせた。プエブロからの先発隊が北へ進んでフォートララミーへ行き、そこでブリガム・ヤングと開拓者たちに会った。ヤング大管長は、プエブロの残りの聖徒たちをソルトレーク盆地に導くためにアマサ・ライマン長老たちを派遣した。ヤング大管長たちは先発隊のわずか5日後にソルトレーク盆地へ到着していた。

ウィンタークォーターズ——開拓者たちの備えの地

1846年から47年にかけての冬、モルモン大隊は人跡未踏の砂漠を進み、ブルックリン号の聖徒たちは航海を終え、サンフランシスコ湾に上陸し、プエブロの聖徒たちは春の到来を待っていた。そのころ、ネブラスカのウィンタークォーターズの聖徒たちは、ロッキー山脈を目指す西への旅の準備に慌ただしくしていた。

西部への旅の計画は、1846年の秋の間に立てられていた。比較的小規模の隊が平原を先に進み、後続の大人数の隊のために道を切り開くということが決められた。しかしこの小規模な企てを行うにしても、かなりの準備が必要であった。幌馬車が作られて必要な装備が整えられた。また1,000マイル（約1,600キロ）に及ぶ過酷な旅に耐えられる牛馬や食糧その他の物資が集められた。そして後に残る者たちの暮らしと安全のための手立てがなされた。

同様に重要なのは、西部の広大な未知の地域に関する情報を得ることであった。教会の指導者たちは11月と12月に、ウィンタークォーターズの西へ向かう道について、ピーター・サーピーなど、地元の商人やわな猟師たちの話を聞いたほかに、最近までロッキー山中にいた経験のある4人の人物の意見も聞いた。オレゴンのインディアンの中で伝道をしていたカトリックの神父ピエール・ジャン・ド・スメットが、山岳地帯での5年の生活を終え、セントルイスに向かう途中、キャンプに到着した。彼はグレートソルトレークを訪れた数少ない白人の一人であった。この好機を捕らえて、教会の指導者たちは、事細かに質問をした。それから5日後には、アメリカ毛皮会社の二人の商人からロッキー西部地域について詳細な情報を得、居住に最適な地域の地図を作成した。後にはオマハインディアンとの通訳であったローガン・フ

時満ちる時代の教会歴史

オンテネルが、西部への道と山岳部における入植に最適な地域を詳細に話している。

教会の指導者の一人ジョージ・ミラーは、ルートの選択と入植計画についてブリガム・ヤングと論じ合った。しかし、頑固な彼は、教会の中で十二使徒たちが最終的な決定権を持っていることに同意できず、ネブラスカ北部ニオブララ川のボンカインディアンの地に住むために、小人数の聖徒を連れて出て行った。教会指導者間のこのような考えの相違が危険であると考え、ヤング会長は、ミラーと彼に従った者たちにどう対処すべきかについて主の御心を尋ねた。1847年1月11日、ブリガム・ヤングは前日に見た一つの夢のことを話した。その夢の中で、彼は隊の編成をどうするのがいちばん良いかについて、ジョセフ・スミスと話し合ったのである。その3日後にブリガム・ヤングは教会員に対して「西部に向かって旅をしているイスラエルの陣営に関する主の言葉と御心」を発表した（教義と聖約136：1）。

神権定員会の集まりにおいて、教会への啓示として受け入れられたこの文書は、西部への移住の旅をする聖徒たちの行動規範となった。この啓示の中で、移住の旅は「十二使徒会の指示の下に」（3節）行われると定められ、聖徒たちは「主なるわたしたちの神のすべての戒めと掟^{おきて}を守るという聖約と約束」（2節）をするように求められた。それには、移住の旅への備えや、貧しい者、やもめ、父のいない子供、モルモン大隊の家族の世話などについて、数多くの実際的な指示も含まれていた。一人一人が「自分の影響力と財産をすべて使って、主がシオンのステーキを設ける場所にこの民を移すように」（10節）求められた。また聖徒たちは、互いに争うことをやめ、自分たちの中にある罪惡をなくすように命じられた。

各宿営所に代表が赴き、この啓示を読み、先発隊またそれに続いて年内に出発する隊に入るようブリガム・ヤングから望まれた者たちの名前を発表した。教会の指導者たちは、春の間中、何度も数多くの隊との集会^{かんがい}を持ち、当面のルート選定、渡し船の建造、旅の手順、作物の植付け、灌漑などに関する情報を与えた。

最初の計画では、イスラエルの十二の部族にそれぞれに12名ずつというように、先発隊として144人を厳選することになっていたが、最終的には143名（南部の教会員の使用人3名を含む）の男性と、3名の女性（ブリガム・ヤング、ヒーバー・C・キンボール、ロレンゾ・ダウ・ヤングの妻）、2名の子供の編成となった。全体的に見て、彼らは先駆けとして必要な様々な才能や技術を持ち合わせていた。機械工、牛馬の御者、狩猟、辺境地の生活体験者、大工、船員、兵士、会計士、れんが職人、かじ職人、土木技師など、多彩な顔ぶれであった。隊の中の8人は使徒で、シオンの陣営に加わった者も数名いた。先発隊は、ボート、大砲、7両の幌馬車と自家用馬車を装備し、93頭の馬、52頭のラバ、66頭の雄牛、19頭の雌牛、17匹の犬、何羽かの鶏を連れていた。

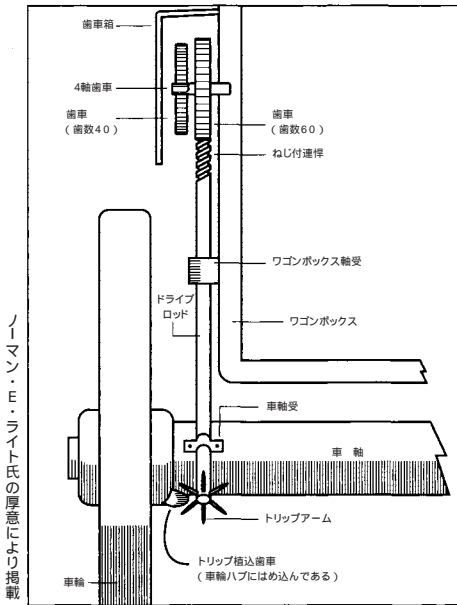
先発隊の旅

先発隊の一部は1847年4月5日にウィンタークォーターズを出発したが、総大会やパーリー・P・ブラット、ジョン・テーラーのイギリスからの帰国によって生じた遅れのため、当初の数日間、旅はほとんど進まなかった。この二人の使徒の到着は祝福をもたらした。彼らはイギリスの聖徒たちからの献金、また緯度、高度、温度、気圧などを測定する科学的な計器類を持ち帰ったのである。この二人とともにイギ



先発隊の3人の女性 ロレンゾ・D・ヤングの妻ハリエット・ウィーラー・ヤング、ブリガム・ヤング会長の妻クララ・デッカー・ヤング、ヒーバー・C・キンボールの妻エレン・サンダース・キンボール。

西へ向かう開拓者たち



1847年5月16日、進んだ道のりを計るために幌馬車の回転数をひたすら数える退屈な仕事から歴史記録係のウィリアム・クレイトンを解放するために、カウンシルブラッスとフォートラミーの中ほどの地点で、この有名な距離測定計が取り付けられた。この測定計は10マイル（約16キロ）まで測定すると、また次の10マイルまでを測定するという方式であった。

ウィンタークォーターズへ戻る旅のときには、最高1,000マイル(約1,600キロ)まで測定できる新しい測定計が作られ、ウィリアム・クレイトンはソルトレーク盆地からウィンタークォーターズまでの全行程を首尾よく測定することができた。

1847年の先発隊は、現在のネブラスカ州オマハに近いウィンタークォーターズからソルトレーク盆地まで1,100マイル（約1,760キロ）の行程を進んだ。先発隊はまず川幅が広く、ゆるやかな流れのブラット川流域を600マイル（960キロ）ほど進み、6月1日にワイオミングのフォートラミーに到着した。そこからブラット川南岸に渡ってオレゴントレイルに入り、さらに400マイル以上（約640キロ）行くとフォートブリッジャーであった。

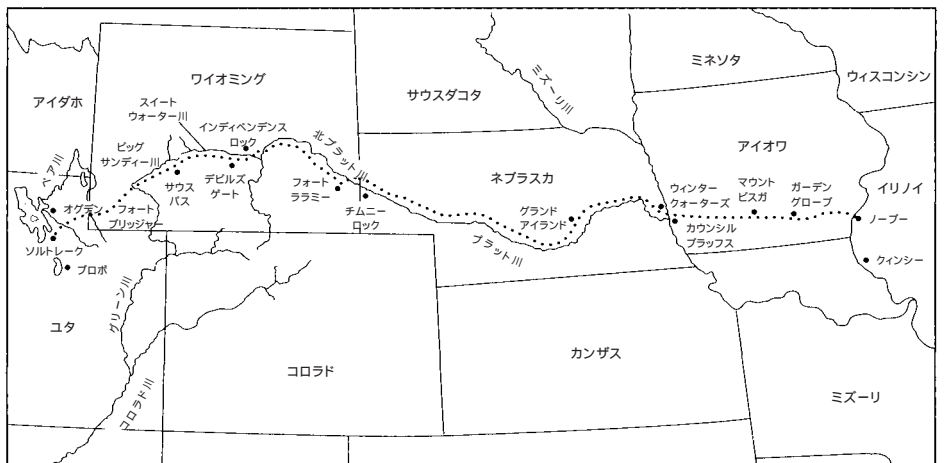
ワイオミングのインディペンデンスロックをさらに西へ進むと、サウスパスで大陸の分水界を越えた。そこから南西某地点で、先発隊はジム・ブリッジャーと出会った。そして7月7日には、フォートブリッジャーに到着した。彼らはそこからさらに南下し、リード・ドナー隊が通過したルートを進み、ソルトレーク盆地へ入ったのである。

全行程の中でも最も険しいこの最後の部分において、ブリガム・ヤングは高山病にかかり、隊は先導隊、本隊、そしてブリガム・ヤングのいる後衛隊の3つのグループに分かれた。

リスに渡ったオーソン・ハイドも5月中旬に帰還した。この3人はまだ旅装が整っていなかったために、ウィンタークォーターズにとどまった。プラット長老とテラー長老は、春も遅くなってから、ほかの隊とともに出発し、ハイド長老はまだミズーリ川方面に残っていた聖徒たちの指導に当たった。

結局、先発隊が1,000マイル（約1600キロ）に及ぶ旅を始めたのは、4月16日であった。出発してから2日後に、ブリガム・ヤングは、インディアンの攻撃に遭遇したときのことを考え、隊を軍隊式の編成にした。隊の正式な歴史記録係だったウィリアム・クレイトンは、後続する聖徒たちのために正確な里程を記録した。最初の数日間、このきちようめんな記録係は毎日進んだ距離数を算出するために幌馬車の回転数を数えていたが、間もなく、距離測定車の使用を提案した。科学的な思考の得意なオーソン・プラットがその測定器の設計をし、熟練した木工職人アップルトン・ハーモンが実際にそれを製作した。

先発隊はできるかぎり、既存の道を選んで進んだ。ウィンタークォーターズとソルトレーク盆地の間では、道路を新たに切り開くことはほとんどなかった。ネブラスカでは、プラット川南岸沿いにオレゴントレイルが走っていた。モルモントレイルはワイオミングのフォートラミーまではオレゴントレイルと平行して走っていたが、プラット川の北側を進むルートを取っていた。それは聖徒たちが家畜のためにオレゴントレイルよりも良いえさ場を求め、オレゴンへ向かう移住者たちとの衝突を避けたいと望んだ結果であった。さらにモルモントレイルは、フォートラミーからフォートブリッジャーまではワイオミングを通過した。プラット川北岸の険しい断崖のために、聖徒たちはフォートラミーで渡河し、オレゴントレイルを640キロ進まざるを得なかった。オレゴントレイルは、フォートブリッジャーで太平洋岸地域に向けて北に方角を変えた。そしてモルモントレイルの最後は、リード一家とドナー一家の隊も通った、ロッキー山中をソルトレーク盆地に抜けるルートであった。



5月26日に先発隊は、旅人たちの目を引きつけるワイオミングのチムニーロック（煙突岩）を通過した。移住する聖徒たちは、そこを全行程の中間地点と考えていた。模擬裁判や票決、ギャンブル、トランプ遊びに興じる一部の隊員のふまじめさや不敬な態度に対して、ブリガム・ヤングとヒーバー・C・キンボールが懸念を示したのは、このチムニーロックの近くの地点においてであった。この二人の使徒はある晩



チムニーロックは西部への移住者たちにとって最も有名な自然の陸標であった。ネブラスカ西部を進む開拓者たちは、何日にもわたってこの光景を見続けた。開拓者たちはこの近くでインディアンのスー族と遭遇した。平原インディアンとの最初の出会であった。

遅く、御霊に動かされ、隊員たちに悔い改めを求めることについて話し合った。そして翌日、ブリガム・ヤングが隊員たちに簡潔な内容の話をした。

ウィリアム・クレイトンはそのときのブリガム・ヤングの言葉を次のように記録している。「わたしに祈りの人、^{めいそう}瞑想の人、分別を備えた人を与えてください。今のこのような状態のこの隊に自分自身をゆだねるよりは、6人でも8人でもいいからそのような祈り、信仰、瞑想の人々と一緒に未開人の中に入って行った方がはるかに良いと思います。……皆さんは、粗野で、卑しく、下劣で軽薄、強欲で、邪悪な思いを心に宿した状態で、王国を築き、もろもろの国民を招き入れるための聖徒の家、安息の場所、平安の場所を見つけることができるのでしょうか。それは無駄なことです。」そして最後に、ブリガム・ヤングは悔い改めを叫んだ。「もし彼ら〔兄弟たち〕に、罪を捨てて主に立ち返り、主に仕え、神の御名を尊ぶという聖約を立てる気持ちがないなら、自分の幌馬車でもと来た道を戻ってください。わたしはこのような状態のまま、これ以上先へ進もうとは思いません。悔い改めて、罪を捨てなければ、わたしたちはこれまで以上に妨げを受け、ひどい嵐に見舞われることでしょう。」⁸

翌日の日曜日、ブリガム・ヤングは指導者たちを集めて、特別集会を開いた。彼らは神殿衣に身を包んで、断崖の上に行き、祈りの輪を作った。ウィリアム・クレイトンによると、彼らは「自分たち、またこの隊と隊に関係するすべての人、軍籍にある兄弟たち、わたしたちの家族、すべての聖徒たちのために神に祈りをささげた。」⁹その後、隊の中には前よりも神聖な雰囲気占めるようになった。

フォートラミーで隊は修理のために足を休め、ブリガム・ヤングの46歳の誕生日を祝った。そしてこの日、プエブロの聖徒たちの一部が隊に合流した。ブラット川（現ワイオミング州キャスパー）の最後の渡河の際に、開拓者たちは「密輸監視艇」と呼ばれた船を用いて、物資を運んだ。そして幌馬車の運搬のためには、いかに船を作った。オレゴンを目指す幾人かが、ここを渡るために幌馬車1両につき1ドル50セントを支払った。ブリガム・ヤングはこのことを、必要な資金を稼ぐのに良い機会と見て取り、この渡し船を続けるために9人をここに残した。そして本隊はサウスパスを通過して、グリーン川をいかだで渡り、7月の早くにフォートブリッジャーに到着した。

先発隊は西への旅を続ける中で、モーゼズ・ハリス、ジム・ブリッジャー、マイルズ・グッドイヤーなど数多くの山男と出会った。ハリスとブリッジャーは、ソルトレーク盆地での農耕は困難だという考えを述べた。グッドイヤーは、農業を成功させることに非常に熱心で、聖徒たちに自分が住んでいたウェーバー盆地への入植を勧めた。

フォートブリッジャーを過ぎてからの山越えの旅はなおいっそう困難なものになった。ソルトレーク盆地に着くまでに、隊は3つのグループに分かれていた。高山病で体調を崩したブリガム・ヤングは本隊から遅れていた。7月13日以降は、オーソン・ブラットの指揮する第3隊が先行し、進路の計画を立て、エミグレーションキャニオンと呼ばれるようになった地域に幌馬車が通れる道を切り開くことになった。7月21日に、オーソン・ブラットとエラスタス・スノーが最初にソルトレーク盆地をかいま見、喜びの声を上げた。盆地までさらに12マイル（20キロ弱）の距離を進ん

西へ向かう開拓者たち



もう一つの有名な陸標インディペンデンスロックは、ワイオミングのスウィートウォーター川沿いを96マイル（約150キロ）進むルートの始まりを示していた。開拓者の時代から今日に至るまでの移住者たちが岩に刻んだ落書きが現在も残っている。

でから、二人は隊へ戻った。

この隊の先遣グループがソルトレーク盆地へ入ったのは1847年7月22日のことであった。彼らはその後すぐに、大地を潤し、耕作の準備をするために簡単な灌漑システムを作り始めた。7月24日にブリガム・ヤングと後続の隊員たちが、現在のエミグレーションキャニオンからソルトレーク盆地を見渡す地点に到着した。ヤング会長を乗せた馬車をウィルフォード・ウッドラフが御していた。彼らは盆地を見渡しなが、将来に目を向けていた。ウィルフォード・ウッドラフは次のように記録している。「長い年月を経ずに、山々の頂に神の宮がそびえ、シオンの住民によってこの盆地が果樹園、ぶどう畑、菜園、農地に変えられ、諸国民をそこへ集合させるための旗がはためくさまを思ったときに、静かな歓喜の情がわたしたちの胸中を走った。」ブリガム・ヤングは「聖徒たちの安息の地」である盆地の様子を見て満足し、「自分の旅が十分に報いられた」¹⁰と感じた。

後に、ウィルフォード・ウッドラフは、エミグレーションキャニオンから出て来たときに、ヤング会長が盆地の全容を見渡すことができるように、馬車の向きを変えたと説明している。「彼はわたしたちの前に横たわる光景をじっと見詰めながら、数分間示現に心を奪われていた。彼は前にも示現でこの盆地を見ていたが、このときには、これらの山々に囲まれた盆地に打ち建てられる将来のシオンとイスラエルの栄光をあるがままに見たのであった。示現が閉じると、彼は言った。『結構です。まさにこの地です。さあ、行きましょう。』」¹¹

盆地における入植地の確立

7月25日日曜日は、神への礼拝と感謝の日であった。十二使徒会の会員たちが、午前と午後の集会において、勤勉に働くことと高潔な行いの大切さについて話をした。盆地における最初の数日は、入植に最適の地を見つけるために北から南の地まで調査が行われた。市の区域をどこにするかについてのブリガム・ヤングの判断は、7月28日までには固まった。彼はシティークリークの2本の流れの間に、神殿を建てる場所を決めた。市街地は、そこを中心にして東西南北に道路を走らせ、各ブロックは四角形となるように決められた。

最初の何週間かは、なすべきことが山のようにあった。1週間以内に、その地域の測量が始まり、耕作に従事しない者たちは、インディアンや野生の動物から守る仮のとりでを作るため、れんが作りの仕事を行った。10月にソルトレーク盆地に到着していた「ミシシippiの聖徒」とモルモン大隊の兵士たちは、神殿の建つブロックの中に仮設の集会場を作った。ソルトレーク盆地で最初に生まれたのはエリザベス・スチールという女の子で、8月9日にモルモン大隊員の家族の子供として誕生した。その2日後に、聖徒たちはミシシippiから来た夫婦の子供の死を悼んだ。ミルトン・スレルキルというその3歳の男の子は、キャンプから迷い出て、シティークリークで水死したのであった。

周辺地域の調査も行われた。ブリガム・ヤングと十二使徒たちは北側にまるで山のようにそびえる高台に登り、そこでシオンについて預言し、イザヤの次の預言にちなんで、その地をエンサインピーク（「旗の頂」の意）と名付けた。「主は国々のために旗をあげて、イスラエルの追いやられた者を集め……。」（イザヤ11：12）近

時満ちる時代の教会歴史

隣の盆地を探検するための調査隊も派遣された。また聖徒たちは、西側のグレートソルトレークでの水遊びや市の北側の硫黄温泉の楽しみを発見した。

ブリガム・ヤング、十二使徒、先発隊の隊員のほとんどが、1847年にソルトレーク盆地で過ごしたのはわずかに33日だけであった。8月16日に彼らは自分たちの家族を翌年のソルトレーク盆地までの旅に備えさせるために、ウィンタークォーターズまで戻ったのである。途中彼らは、すでにソルトレーク盆地へ向かっていた1,553名の聖徒たちに出会った。東へ戻る今回は、途中の地勢にも慣れ、幌馬車も荷物も少なくしていたために、前よりもかなり早く旅が進んだ。大きな出来事といえば、多くの貴重な馬をインディアンに奪われたことと、ブリガム・ヤングとヒーバー・C・キンボールがハイルログマに追いかけられたことだった。

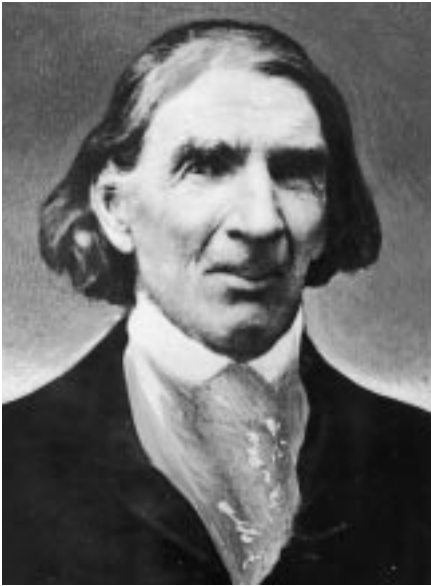
一方、盆地に到着した聖徒たちは、現在のソルトレークの開拓者公園の敷地に当たる「オールドフォート」に腰を落ち着け、冬への備えをした。ブリガム・ヤングは盆地を出発する前に、後続の隊の中にいたジョン・スミスを、新しく組織したソルトレークステークの管理者に任じていた。スミス会長は9月に盆地に到着すると、チャールズ・C・リッチとジョン・ヤングを副会長として選び、高等評議会を組織した。1年前にウィンタークォーターズで作られた高等評議会と同様、この組織は盆地の共同体の霊的な指導者、市民生活の指導者としての役割を果たした。これは1849年1月に至るまで、ユタに存在した唯一の行政機関であった。

大管長会の再組織

ブリガム・ヤングとその同行者たちが、ウィンタークォーターズに到着し、家族との再会を祝ったのは、1847年10月31日の日没直前のことであった。そこへ来るまでの途中、ブリガム・ヤングは十二使徒定員会の会員たちと、大管長会の再組織の可能性について話し合いを持っていた。彼は御霊の促しがあることを強調したが、すべての幹部がすぐに賛意を示したわけではなかった。そのような前例がなかったために、彼らはその時点で大管長会の再組織を行うことが適切かどうか、確信が持てなかったのである。

十二使徒定員会が教会を管理していた3年の間に、重大な課題が幾つも成し遂げられた。彼らが成し遂げたことには、ノーブー神殿の完成と奉獻、多くの忠実な聖徒たちへの神殿のエンダウメントの授与、ノーブーからの撤退、イギリスへの伝道とその地の管理、モルモン大隊の編成、アイオワにおける幾つかの入植地建設、ウィンタークォーターズ入植事業の管理、西部定住地への道の開削などがある。これらのほとんどは、殉教前のジョセフ・スミスに明らかにされたことであり、十二使徒会がすばらしい形で完成させたのである。次に残された課題は、十二使徒会がそのまま教会の管理定員会としてとどまるか、それとも新たに大管長会を組織すべきかということであった。これはいずれかに決しなければならない問題であった。

ブリガム・ヤングはウィンタークォーターズに到着後、引き続き同僚たちと集会を持ち、この問題について話し合った。11月30日に彼は「教会の大管長会として3人の十二使徒を任命する案件」を提議し、そうなればほかの使徒たちが自由になり、「地の諸国民に福音を宣べ伝える」¹²ことができるようになることを示唆した。その提議は、伝道を十二使徒の主たる召しとして指し示した以前の数々の啓示とも一致し



ジョン・スミス（1781 - 1854年）ジョセフ・スミス・シニアの弟。1849年1月1日に、ブリガム・ヤングによって教会の管理祝福師の職に聖任された。

西へ向かう開拓者たち

ていた（教義と聖約107：23；112：1，16，19，28参照）。

1847年に開拓者たちが西へ旅していたころ、アイオワにより恒久的で大規模な入植地が建設され、聖徒たちの味方となってくれたトーマス・L・ケインを記念してケインズビルと名付けられた。衛生上の問題と、土地や建物などをどれほど改善したとしても2年後にはインディアンの土地を去ると聖徒たちが約束していたこともあり、ミズーリ川西岸の地域は放棄していた。ブリガム・ヤングたちが戻って来たころには、聖徒たちの多くは、オーソン・ハイドが管理していたケインズビルやアイオワのほかの入植地への移住をすでに終えていたか、その途次にあった。1847年12月5日、ヤング会長はケインズビルのハイドの家で十二使徒定員会の会合を持った。ヤング会長は、大管長会の件が自分の心の大きな重荷となっていること、また主の御霊がこの問題について強く働きかけていることを話した。そして出席した9人の定員会会員に（パーリー・P・プラットとジョン・テラーはソルトレーク盆地にとどまり、ライマン・ワイトはテキサスにいた）年齢の大きい順にその件について思うところを自由に述べるように求めた。¹³

この話し合いの後に、オーソン・ハイドが末日聖徒イエス・キリスト教会の大管長としてブリガム・ヤングを支持すること、さらに彼が2名の副管長を指名し、その3人をもって新しい大管長会を組織することを動議として提出した。続けてウィルフォード・ウッドラフがその動議に対する賛意を表明し、全員一致で承認された。その後、ブリガム・ヤングがヒーバー・C・キンボールとウィラード・リチャーズを副管長として指名した。そして2名の副管長も全員一致で承認された。

3週間後に、突貫工事でケインズビルに建てられていた丸太造りの大きなタバナクルで総大会が開かれた。12月24日から26日にかけての喜びに満ちた大会の中で、新しい大管長会が発表されるとの期待が高まった。そして1847年12月27日月曜日、1,000人の会員がタバナクルに集い、大管長会、十二使徒定員会、七十人、大祝福師を含む教会の完全な組織の必要性を説くブリガム・ヤングの説明に耳を傾けた。続いて、オーソン・プラットが新しい大管長としてブリガム・ヤングの名を提議し、聖徒たちは喜んで彼に対する賛意を表明した。次に、ヤング大管長が副管長の名を提議し、同様に支持を受けた。最後に、組織されて間もないソルトレークステークの会長ジョン・スミス（預言者ジョセフ・スミスのおじ）が新しい大祝福師としての支持を受けた。これらの教会役員は、1848年10月14日に、ソルトレーク盆地において再び支持を受けた。¹⁴

末日聖徒の第一陣がソルトレーク盆地に到着したことは重大なことであったが、1847年に起こった出来事で最も意義深いものは、教会が管理指導する最上位の権能が、十二使徒定員会から新しい大管長会に円滑に移行したことであった。大管長の職の継承に関しては、これによって先例が示され、現在に至っている。

注

1. ダニエル・タイラー、*A Concise History of the Mormon Battalion in the Mexican War, 1846 - 1847* 『メキシコ戦争におけるモルモン大隊の略史』1846 - 1847年（Glorieta, N. Mex.: Rio Grande Press, 1964），128 - 129で引用
2. タイラー『略史』128
3. マルガリート・H・アレン 編，*Henry*

時満ちる時代の教会歴史

Hendricks Genealogy 『ヘンリー・ヘンドリクス
の系図』(Salt Lake City: Hendricks Family
Organization, 1963), 26 - 27

4. タイラー 『略史』 144

5. A・R・モーテンセン編 “The Command and
Staff of the Mormon Battalion in the Mexican
War” 「メキシコ戦争におけるモルモン大隊の
司令官と将校」 *Utah Historical Quarterly* 『季
刊・ユタ史』 1952年10月号, 343で引用

6. ヘンリー・ピグラーの日記より抜粋

7. “Rules and Regulations” *Times and Seasons*
「標準と規則」 『タイムズ・アンド・シーズンズ』
1846年2月15日付, 1127 - 1128

8. ウィリアム・クレイトン, *William Clayton's*
Journal 『ウィリアム・クレイトンの日記』
(Salt Lake City: Deseret News, 1921), 191,
194, 197

9. クレイトン 『ウィリアム・クレイトンの日記』
202 - 203

10. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1847
年7月24日, 末日聖徒歴史記録部, ソルトレー
ク・シティ

11. “Pioneers' Day” *Deseret Evening News*
「開拓者の日」 『デゼレト・イブニング・ニュー
ズ』 1880年7月26日付, 2

12. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1847
年11月30日

13. ウィルフォード・ウッドラフの日記, 1847
年12月5日参照

14. *History of the Church* 『教会歴史』 7 :
623 - 624参照